

はじめに

最近、書店の旅行ガイドブックコーナーで「大学的ガイド こだわりの歩き方」を見かけるようになった。そのシリーズの中で、唯一の海外ガイドは鎌田真弓編著「オーストラリアガイド」である。筆者の最初の海外旅行はオーストラリアであり、その1981年時点ではオーストラリアガイドは販売されていなかった。その次のアメリカ旅行から「地球の歩き方」を愛用しているが、当時はアメリカとヨーロッパの「歩き方」しかなかった。しかし、その内容は1日5000円での旅を前提とし、とくに地方都市への行き方もカバーする優れものであった。ホテル案内のところには割引券も付いており、サンフランシスコのオリンピックホテルでは黄色い表紙の本ということで有名になっていた。

それから40年が過ぎ、バブル経済や円高を背景として、「地球の歩き方」でさえも四つ星以上のホテルと高級レストランの紹介ページが多くを占めるようになり、その国のこと自体を知るために行くべきところを紹介してくれるガイドを渴望しているときに、まず筆者の住む奈良、次いでオーストラリアの「大学的ガイド」が昭和堂から刊行された。

「大学的オーストラリアガイド」の執筆にはオーストラリア学会の会員が数多く参加し、「海を渡ってオーストラリアへ」、「多民族社会オーストラリア」、「戦争とオーストラリア」の三部構成となっている。地理的には北部や内陸部を対象とする内容が多く、学術分野的には、文学や社会学の内容が多い。これに対して、本書は経済と国際政治、およびそれに関連する歴史に関する内容が多く、「大学的オーストラリアガイド」とは補完的な姉妹書として活用していただければ幸いである。

20世紀はアメリカが「善意ある大国」として世界をリードした。しかし、それがベトナム戦争で揺らぎ、一度は回復したものの、イラク戦争やアフガニスタン紛争を通じて再び揺らいでいる。対外的揺らぎ以上に深刻なのが国内の分断であり、共和党と民主党の政権が交代するたびに対外政策も国内政策も大きく不連続に変化するようになった。一方、オーストラリアはアメリカ同様に多くの移民を受け入れながら、「ミドルパワーのベンチャー型中企業国家」としてブレの少ない安定的な国家運営を実現している。また、経済的には羊や鉱物資源に恵まれたラッキーカンントリーから脱却する新たな方向性が現れ始めている。自然科学の分野においても、電波天文学で世界をリードしアポロ11号の月面着陸の中継で活躍したパークス天文台があり、小惑星探査機「はやぶさ1・2号機」がウーメラ砂漠に帰還するなど日本との関連も深い。ただ、本書の第4章で指摘したように、太平洋島嶼国との関係においては教条主義的になり過ぎた傾向があり、その反省を今後はどう活かせるか見守りたい。

本書は大学生でこれから研究対象地域・国を選択する段階にある学生や、留学先を決めるべき時期にさしかかっている学生を読者層として念頭に置きながら執筆したものである。先ほど述べた「大学的オーストラリアガイド」と合わせて参考にして、オーストラリアを研究や留学の対象候補として考えていただければ幸いである。さらに欲を言えば、そこから得られた知見を、宇宙船地球号の救済や日本の再建に向けて活用していただきたい。